特集

74巻3号

公衆衛生再考

公衆衛生制度は西欧社会の市民型社会，分権型社会の中で育ってきたものであります．にもかかわらず，明治期の先人は新しい国づくりの中に公衆衛生の思想や理念も含めたフルセット型をめざしたようです．案の定，当初の公衆衛生制度は明治中期に頓挫してしまいました．また明治期に導入された医学教育制度の中には衛生学があるのみで，公衆衛生学は導入されるに至りませんでした．

第二次世界大戦後に進駐してきたGHQにより，わが国の医学教育の中に公衆衛生教育が導入されてから，半世紀を経ています．現在，わが国の公衆衛生はどのような状況にあるのでしょうか．明治期の先人，GHQが持ち込もうとした公衆衛生が，わが国の中でどのように推移してきたのでしょうか．

近年，国・都道府県などの行政組織，大学医学部の中に存在していた「公衆衛生」の名称を見かけることが少なくなってきています．一方，社会の中の国民の健康を取り巻く状況を見ると，貧困，虐待，自殺，過労死など理不尽な死に関わる深刻な公衆衛生課題が目立ってきています．わが国も地方分権，新しい公共の創造，人に優しい社会の実現に向けた議論がなされるようになってきています．このような社会の流れの中で，公衆衛生制度についてもそのあり方を真剣に考えていくことが不可避になってきているように思われます．

本特集では，政治，経済，社会学など社会の幅広い分野の研究者の視点から，社会のあり方や，「公」とは何かについてご教授いただき，公衆衛生の原点に立ち返って，改めて公衆衛生とは何かについて考えてみる機会としていただければ幸いです．

©IGAKU-SHOIN Ltd. 2010

2026/10/09 23:27:44